

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 12 日現在

機関番号：17101

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24730539

研究課題名(和文) 授業談話過程における教師の感情の機能性の検討

研究課題名(英文) The role of teachers' emotions in the practice of teaching

研究代表者

松尾 剛 (Matsuo, Go)

福岡教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：50525582

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：教師が授業中に経験する様々な感情が、授業の過程にどのような影響を与えているかを検討した。主な成果は以下の3点である。(1)小学校、中学校の教員を対象とする質問紙調査を通じて、授業中に経験されている感情の種類についての整理を行なった。(2)授業の振り返りの分析を通じて、感情の生起と授業への影響を検討した。特に初任者について、事前の計画と実際の授業展開のズレによって引き起こされる負の感情が授業の妨げになること、長期的展望にもとづく「ひらきなおりの感情が授業中の計画修正を促すことなどが示された。(3)授業過程におけるオンラインでの感情の測定方法として心拍数の応用可能性が示唆された。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this project was to examine the relationship between teachers' emotion and classroom discourse processes. Three main research findings was showed. (1)The teachers' emotion experienced in the lesson was systematically-gathered based on collected data from 379 elementary, and junior high school teachers. (2)By qualitative analysis of one beginning teachers' reflection, the cause and effect of teacher's emotion was examined. When the lesson didn't go according to plan, the teacher felt several negative emotions, and it impeded teaching activity. In the context of necessitating a change in the plan, the teacher often experienced the "feeling of resignation", and changed the plan based on a long-term perspective. (3) A possible beneficial effect of heart rate as an index of teachers' emotional process on the lesson was suggested.

研究分野：教授・学習心理学

キーワード：協同学習 感情 教室談話 教師認知

1. 研究開始当初の背景

本研究の目的は、授業において児童相互の話し合いを通じた学びを実現する教師の実践的技量の向上であった。従来の研究では、主として、児童の学びを促す話し合いとはどのような過程を含むのか、という点についての整理がなされている(e.g., 松尾・丸野, 2009)。具体的には、他者に考えを伝えるために精緻な論証を構成すること、他者の意見を注意深く、批判的に傾聴すること、そしてその中で生じる自己省察的な思考の重要性などが示されてきた。

しかし、そのような話し合いを授業の中で実現することは容易でない。そのため、近年では、授業中の談話過程を分析して効果的な話し合いの実現に有効に機能する教師の関わりを提案する研究がなされている。例えば、児童の発言を教師が言い換えて確認する「リヴォイシング(Revoicing)」(e.g., O' Connor & Michaels, 1993)や、児童の発言の曖昧な部分を精緻化させるための質問「リフレクティブ・トス(Reflective Toss)」(e.g., van Zee & Minstrell, 1997)といった談話方略は、教師主導の授業に特有の発問・応答・評価という発話連鎖(e.g., Mehan, 1979)を変え、児童が自他の考えを振り返ったり、比較、吟味・検討したりするような機会を授業の中に生成しうる。また、教師が意図的に沈黙すること(e.g., Tobin, 1987; van Zee et al., 2001)も同様の機能を担いうる。また、実際の発言だけでなく、板書なども同様に児童の発言間の整理や論理構造の可視化などの機能を担っていることも示されている(e.g., 松尾・丸野, 2010; 松尾・丸野・山本, 2011)。さらに、このような教師の働きかけが機能する前提として、授業中の相互作用に関する語用論的な規範(グラウンド・ルール)を共有してゆくことも教師の重要な役割である。その共有の過程では、授業中の議論の中で教師が学びのプロセスを明確化し、意味づけていく事の重要性が指摘されている(e.g., 松尾・丸野, 2007; 松尾・丸野, 2010)。

このように、従来の研究は話し合いを通じた学びを実現するために教師が「何をすべきか」という問いを主として扱ってきた。一方で、このような教師の働きかけが「いかにして可能となっているのか」という問いに対する研究はまだまだ十分ではない。特に、上述したような、話し合いの実現を支える教師の働きかけは、授業の流れの中で行われる児童の発言への即興的な応答であるという特徴を持つ。この即興性という特徴が、多くの教師にとって実践を困難にしており、また、実践技量の育成や継承も困難にしている。そこで、教師による児童の発言への即興的な応答を支えている心理過程の検討が重要な課題となっている。

2. 研究の目的

教師の即興的な応答に関連すると考えら

れる研究に教師の即自的意思決定に関する研究がある(e.g., 岡根・吉崎, 1992; 樋口, 1995)。しかし、従来の研究は、教師があらかじめ計画した流れに沿った形で授業を展開させるために、児童から望ましい発言を引き出していき、という授業スタイルを前提として研究を行ってきた。そのため、教師の意思決定過程も、授業に先立って教師が授業の流れ(授業の展開や児童から引き出すべき発言など)を明確に定め、授業ではその計画からのズレを常にモニターし、いかにして児童を計画通りに動かしていくか、といった非常に合理的、論理的な認知過程としてモデル化されてきた。その結果、従来の研究はこのような合理性を教師の意思決定の前提とし、「感情」を不合理なものとして研究の対象から排除してきた(e.g., 岡根・吉崎, 1992)。

それに対して「感情」を即興的で適応的な思考を支える要因の一つとして見なす立場もある(e.g., 海保, 1997)。特に、感情による処理に共通する特徴として、素早く人間に現時点での課題解決のスタンスを準備させて、適切に動かしていく(e.g., 北村・木村, 2006)点が指摘されている。これらの知見を踏まえるならば、本研究が前提とする授業における意思決定過程では、教師の感情は研究から排除されるべき対象ではなく、むしろ教師の即興的な認知を支える重要な要因だと見なされるべきであると考えられる。実際に、木村(2010)は高校の社会科教師 10 名へのインタビュー調査を行っており、協働学習授業の実践過程において快感情が「認知・思考範囲の拡張」「即興的な授業展開」などと関連し、不快感情が「授業中の省察」「即興的な授業展開」などと関連することを示している。このような研究の現状を踏まえて、本研究では教師が授業中に経験する様々な感情が、授業の過程にどのような影響を与えているかを検討することを目的とした。

具体的には以下の点を検討した。第一に、そもそも教師は授業実践の過程において、どのような感情を経験しているのか、について体系的な収集と整理を行なった。第二に、実際の授業中のどのような状況が、教師のどのような感情を引き起こし、その感情がどのような行動へとつながっているのか、という点について具体的な授業実践の過程に即して探索的に検討を行なった。第三に、上記の研究成果を踏まえて、授業中の教師の感情状態をオンラインで測定し、かつ、直後の振り返りにおいて教師に対する提示が可能な指標として、心拍数の応用可能性を検討した。

3. 研究の方法

教師が授業中に経験している感情を体系的に収集するため、予備調査として、小学校および中学校の初任者教員 379 名を対象として、授業中に生じた感情の内容、その感情が生じた状況、その感情が以降の授業展開に与えた影響、などについて自由記述を求め

る調査を実施した。

さらに、この予備調査の結果をふまえて、具体的な授業の文脈と教師の感情との関連性について検討するために、教育実習生を対象として、自分の授業をVTR録画したものを視聴しながら振り返りを行なうことを求め、その記述内容について分析を行なった。また、VTRの録画に関しては授業の振り返りにおいて感情に関する記述を引き出すために、頭部に装着可能なビデオカメラを用いることで、授業者の視点からの映像を撮影した。

第三の研究目的を達成するために、2つの小学校において、6名の教師に小型の心拍系を装着した状態で授業を実施してもらい、その変化と授業中の具体的な関わりの様相、また、教師による振り返りの内容との関連性についての検討を行なった。

4. 研究成果

(1)研究方法(2)に記載した、教育実習生による授業の振り返りの記述について、授業中に生じた感情の種類、感情が生じた状況、感情が授業中の行動や認知に与えた影響、についてカテゴリー分析を行った。研究方法(1)に記載した調査結果をもとにしながら、自由記述中の感情の種類について分類を行い、26の感情を抽出した。感情の生起頻度については、実習期間の全体において【焦った】【迷った・ためらった】という感情の記述頻度が高いという傾向が見られたが、実習の後半になると【落ち着いた】や【満足した】【嬉しい】などの感情に関する記述の割合が高くなる傾向も見られた。感情の生起プロセスについては、実習の前半部分において頻繁に生じていた【焦った】【迷った・ためらった】という感情は、授業中の時間配分の難しさ、生徒の発言の理解や応答の難しさ、様々な状況判断の難しさ、というように、様々な状況での困難の経験をきっかけとして生起しており、教育実習生が授業を行う過程で経験する感情の核となるものであることが推察できる。また、このような感情は、その後の説明をわかりにくいものにしてしまったり、生徒の発言を理解する事をより困難にしてしまったりするなど、主に非適応的な教授行為を引き起こす要因となりうることも示唆された。対象的に、授業が自分の計画通りに進められている状況では【満足した】【安心した】といった感情が生起していた。また、生徒の側の要因としての、授業に対する積極的な参加という状況は、実習生に【自信のある】【嬉しい】といった感情を生起していた。単に計画どおりに進行して安心しているという状況とは異なり、生徒の肯定的な反応から、実習生が授業に対する効力感を得ていることがわかる。また、このようなポジティブな感情については、その後の教授行為への影響がほとんど記述されていなかった。また、教育実習生は、しばしば授業が事前の計画通りに進まず、即座に授業計画や目標の変更を行わざるをえない状況に立

たされるということがある。このような授業計画の変更に関連する感情として記述されていたのが【あきらめた】【開き直った】というものであった。授業が必ずしも自分の思い通りに展開しない状況において、混乱のために何もできなくなってしまうのではなく、今の自分に可能な方法の中で最善と思える方針を見つけ、現在の自分と授業の状況との間になんとか折り合いをつけていこうとする過程で生じる感情だと考えられるのではないだろうか。

(2)授業中の教師の心拍数(HR)の変動と授業過程の関連性について分析を行なった。調査対象とした6名の教師について、心拍数を個人内でのZ得点に換算した得点を用いて、階層的クラスター分析を行なった結果、経験年数を反映した3つのクラスターに分類された(図1)。第1クラスターに分類された3名は(T3, T1, T2)は全員教員の経験年数(講師の期間も含む)が5年以下であった。このクラスターに共通する特徴は、授業の導入部分の心拍数が高く、授業の終末部において低下するという変化のパターンであった。教師へのインタビューの結果をふまえると、この前半の心拍数の高さは初任者特有の強い緊張を反映しているものと推測できる。教員経験が5年以上10年以下の2名の教員(T4, T5)は別のクラスターとして分類された。これらの教員に見られた特徴としては、初任者と同様に前半部分において高い心拍数が示されるが、心拍数の下降が見られるタイミングが早く、授業の前半から中盤の心拍数が特に低くなるというパターンが見られた。また、教員経験年数27年のT6においては他の教員のような前半部の心拍数の向上は見られなかったが、授業の後半部において顕著な上昇と下降がみられた。授業後のインタビューにおいて、T6は授業の後半部で、子どもから、なんとかして無理に発言を引き出そうとしている自分に反省や嫌悪感を感じながら授業をしていたと述べていた。授業の後半部で見られた顕著な心拍数の変化は、このような状況によって生じたものと推測される。今後は、本研究の知見を精緻化し、授業中のオンライ

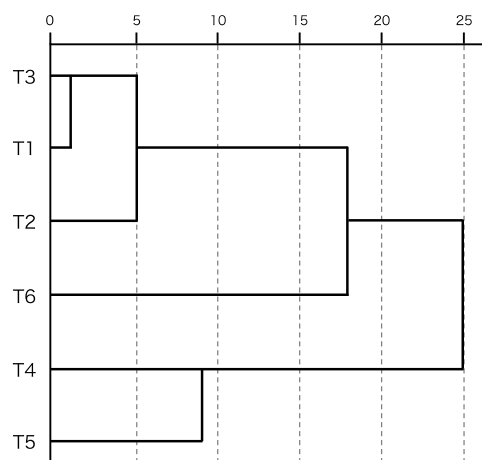


図1. HRに基づく教員のクラスタリング

ンでの感情の測定のための指標としての心拍数の活用可能性を検討すると共に、教師の授業に対する省察を促すための情報としての有効性を検討していく予定である。

<引用文献>

- 樋口直宏 (1995). 授業中の予想外応答場面における教師の意思決定：教師の予想水準に対する児童の応答と対応行動との関係 日本教育工学雑誌, 18, 103-111.
- 海保裕之(編) (1997). 「温かい認知」の心理学 金子書房
- 木村優 (2010). 協働学習授業における高校教師の感情経験と認知・行動・動機づけとの関連：グラウンデッド・セオリー・アプローチによる現象モデルの生成 教育心理学研究, 58, 464-479.
- 北村英哉・木村晴(編) (2006). 感情研究の新展開 ナカニシヤ出版
- 丸野俊一・松尾剛 (2008). 対話を通じた教師の対話と学習 秋田喜代美・キャサリン・ルイス(編)授業の研究教師の学習 レッスンスタディーへのいざない 明石書店 pp.68-97. 350-356.
- 松尾剛・丸野俊一 (2007). 子どもが主体的に考え、学び合う授業を熟練教師はいかに実現しているか：話し合いを支えるグラウンド・ルールの共有過程の分析を通じて 教育心理学研究, 55, 93-105.
- 松尾 剛・丸野俊一 (2009). 学び合う授業を支える談話ルールをいかに共有するか 心理学評論, 52, 245-264.
- 松尾剛・丸野俊一 (2010). 熟練教師は児童の発言をいかに聴いているか 福岡教育大学紀要, 59, 71-78.
- 松尾剛・丸野俊一・山本俊輔 (2011). 日常の授業実践を通じて児童の批判的思考はいかに育まれるか 福岡教育大学紀要, 60, 91-102
- Mehan, H. (1979). Learning lessons : Social organization in the classroom. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- 岡根裕之・吉崎静夫 (1992). 授業設計・実施過程における教師の意思決定に関する研究-即時的意思決定カテゴリーと背景カテゴリーの観点から- 日本教育工学雑誌, 16, 171-184
- O'Connor, M.C., & Michaels, S. (1993). Aligning academic task and participation status through revoicing: Analysis of a classroom discourse strategy. Anthropology and Education Quarterly, 24, 318-335.
- Tobin, K. (1987). The role of wait time in higher cognitive level learning. Review of Educational Research, 57, 69-95.
- van Zee, E., Iwasyk, M., Kurose, A., Simpson, D., & Wild, J. (2001). Student

and teacherquestioning during conversations about science. Journal of Research in Science Teaching, 38, 159-190

van Zee, E., & Minstrell, J. (1997). Usingquestioning to guide student thinking. Journal of the Learning Sciences, 6, 227-269.

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計3件)

松尾剛・萩原由香 (2015). 教育実習生が授業中に経験する感情についての探索的研究 福岡教育大学紀要, 64, 1-6. 査読無

Takagaki, M., Matsuo, G. (2015). Teachers' approach to sharing classroom ground rules using out of class contexts. Bulletin of Fukuoka University of Education, 64, 99-106. 査読無

高垣マユミ・松尾剛・丸野俊一 (2013). 朝の会におけるグラウンド・ルールの共有を図る教師の働きかけ：教室談話のカテゴリー分析及び解釈的分析を通して 教授・学習心理学研究, 9, 29-36. 査読有, [学会発表](計5件)

松尾剛 「授業づくり」の立場から(学会企画シンポジウム 授業研究への発達のアプローチの可能性) 日本発達心理学会第26回大会 東京大学 東京都 2015年3月22日

松尾剛 教育実習生の授業実践過程における感情の生起と機能 日本教育心理学会第56回総会 神戸国際会議場 兵庫県・神戸市 2014年11月7日

松尾剛 授業における教師の感情(自主企画シンポジウム 感情的実践 溢れ出す感情と教育はどのように向き合うべきか) 日本教育心理学会第56回総会 神戸国際会議場 兵庫県・神戸市 2014年11月7日

松尾剛 協同学習を支える文化(自主シンポジウム 授業研究の最前線 協同学習を教育心理学的アプローチから多面的に捉える) 日本教育心理学会第54回総会 琉球大学 沖縄県・中頭郡 2012年11月23日

松尾剛 授業における“応答”の多様性と協働性(自主シンポジウム 教室における対話能力の発達過程-応答する力に焦点を当てて-) 日本発達心理学会第24回大会 明治学院大学 東京都 2013年3月16日

6. 研究組織

(1)研究代表者

松尾 剛 (GO, Matsuo)
福岡教育大学・教育学部・准教授
研究者番号：50525582